

被覆栽培茶の安定生産のための 秋整枝位置は浅刈り面より3節上が良い

近年、高品質茶生産のため、被覆栽培が広く行われていますが、被覆期間の長期化や二番茶被覆茶園の増加により樹勢の低下や収量の減少が顕在化しています。そこで、佐賀県茶業試験場では、被覆栽培でも安定して生産ができる栽培法を確立するため、母葉となる秋芽の形質に大きく関与する秋整枝位置(図1)が翌年の収量・品質に及ぼす影響を明らかにしましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 秋冬季の秋芽表層葉の光合成能力は、秋整枝位置を二番茶後浅刈り面から3節上にするると2節上、4節上より高くなります(図2)。
2. 翌年の一番茶収量は、3節上が2、4節上より増加します。二番茶収量は、3、4節上ともに2節上より増加します。
3. 一番茶の品質は、3節上の全窒素含量は2節上より高く、繊維含量が低いことから品質が向上します。二番茶の品質は、3節上の全窒素含量と繊維含量は2節上とほぼ同等です。
4. 以上の結果から、秋整枝位置を二番茶浅刈り面から3節上とすることで、秋芽表層葉の光合成能力が向上し、翌年の一・二番茶の収量が増加し、品質が向上します。

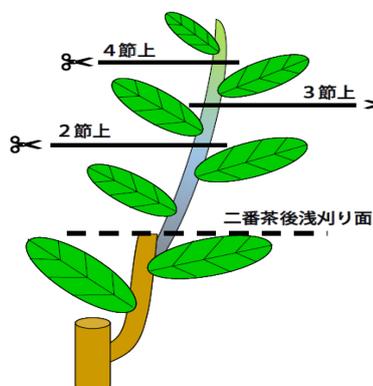


図1 秋整枝位置
1)秋整枝を二番茶後浅刈り面から2節上、3節上および4節上で実施。

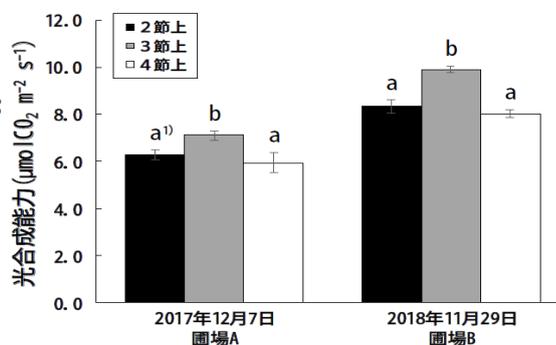


図2 秋整枝位置の違いが秋冬季の秋芽表層葉の光合成能力に及ぼす影響 (n=5)

- 1) 異符号間には5%水準で有意差あり(Tukey-Kramer法)。
- 2) 秋芽の伸長程度を考慮し、2017年は2節上区で二番茶後浅刈り面より6cm、3節上区で8cm、4節上区で10cm、2018年は2節上区で7cm、3節上区で10cm、4節上区で13cmの位置で秋整枝を行った。

☆ 活用面での留意点

1. 圃場条件や気象条件などにより、年ごとに秋芽の伸長程度が異なることから、それを考慮したうえで二番茶浅刈り面から3節上となるように秋整枝の高さを決定する必要があります。
2. 本技術は、樹高が高くなりやすいため、中切り更新から次の更新(4あるいは5年間隔)までに1回ないし2回実施することが望ましい。
3. 詳しいことは、佐賀県茶業試験場(TEL:0954-42-0066)までお問い合わせいただくか、茶業試験場のHP(http://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00322066/index.html)をご覧ください。